

【カステラのある風景】

一葉の

カステラ、かしこ

明治二十九年、樋口一葉、二十四歳。

この年、年の明けから一葉はせっせと手紙を書いている。手紙？
実は手紙の見本。大手出版社博文館から婦人向けの模範手紙集
を書かないかと話があったのだ。

すでに「たけくらべ」で新人作家として名を出しはじめている
一葉だったが、結核の病身をいといながら、半紙を四つに折つ
て何度も何度も下書きをした。

「春雨ふる日友に」と題された一通がある。

うぐいすの声がする、あなたはお寝坊さんだけどいかが？

柳の糸も濡れているでしょうね。人恋しくて、カステラ添え

てお手紙します……。

手製のかすていら折からの御慰みにもと進じ候

笑はせ給へや かしこ

返事の例文も、手づくりのかすていら「是れはどのやうに焼き
申すもの」ご伝授くださいいな、ほんとにお加減お上手……。

でも実際には——一葉にはカステラを焼く楽しみはもう残されて
いなかった。

この五月、『通俗書簡文』は刊行された。

この年十一月、一葉は亡くなった。



ひぐち・いちよう

明治5～29年(1872～1896)

東京生まれ。本名、なつ。八丁堀同心であった父は
警視庁に勤務、退職後事業に失敗し負債を残して
死亡すると、母、妹をかかえて一家の生計は一葉の
背にかぶさった。『にぎりえ』『十三夜』『たけくらべ』
などの名作の哀感の切なさは、生涯逃れることの
できなかった貧窮と切り離しては考えられない。
首席で通した小学校は中退。14歳で中島歌子の萩
の舎に入塾、和歌、書道、古典を学び、精神と文学の
形成に大きな影響を受ける。明治文学に占める地
位は死後に定まった。早過ぎた死から半世紀後の
昭和26年、女性初の文化人切手となる。その半世
紀後の平成16年、五千円札の顔となる。